

徳永仁臣（柳洲）と与謝野寛・晶子

―「詩歌貼交屏風（与謝野夫妻詩歌、柳洲絵）」翻刻・解説―

加藤 美奈子

一 徳永仁臣（柳洲）と、「詩歌貼交屏風（与謝野夫妻詩歌、柳洲絵）」（三島和子氏蔵）翻刻・調査の経緯

岡山県立美術館における「知られざる震災画家 徳永仁臣―柳洲―」展（会期・平成二五年八月三〇日―一〇月二〇日）開催にあたり、同館学芸員・橋村直樹氏より、三島和子氏蔵「詩歌貼交屏風（与謝野夫妻詩歌、柳洲絵）」の翻刻・解説の依頼を受けた。本稿は、同展の展覧会図録・岡山県立美術館編「関東大震災から90年 知られざる震災画家 徳永仁臣―柳洲―」（岡山県立美術館・和気町・和気町教育委員会、平成二五年）掲載の「与謝野夫妻との交流 76 詩歌貼交屏風（与謝野夫妻詩歌、柳洲絵）」・遺品2与謝野寛・晶子合著「巴里より」図版（同書、九〇頁）の橋村氏による「作品解説」（同書、九八頁）を補足し、特に同展示資料の与謝野寛・晶子の短冊・色紙に押捺された短歌作品を中心に解説を加えるものである。

徳永仁臣（とくなが ひとおみ、一八七二（明治四）年―一九三六（昭和一二）年）は、鍵岡正誼・橋村直樹編「徳永仁臣―柳洲―年譜」（「知られざる震災画家 徳永仁臣―柳洲―」（前掲、以下「図録」）九九―一〇七頁）によると、「備前国和気郡藤野村」に生まれ、明治二二年に上京、「二世五姓田芳柳（一八六四―一九四三）主宰の画塾に入門」、「芳柳の一字をもらい、柳洲と号する」。明治四四年十一月、与謝野寛（一八七三（明治六）年―一九三五（昭和一〇）年）・満谷国四郎（一八七四―一九三六、総社出身の洋画家）らとともに横浜から「熱田丸」で渡欧、寛とは親しく、パリでも同宿している。翌明治四五年五月、「シベリア経由」で与謝野晶子（一八七八（明治二二）年―一九四二（昭和一七）年）がパリに着き、柳洲は「晶子に絵画を手ほどきしたり、夫妻と旅行や観劇をして親交を深める」。「図録」には、柳洲・寛・晶子が柳洲のアトリエの前で撮影した写真が掲載されている（fig. 6 1912年アトリエの前で（前列右与謝野晶子、後列

右徳永、左与謝野寛」同書、一〇三頁。柳洲は一九一四（大正三）年一月に帰国、「岡山で数日間を過ごし」帰京。同年四月、「与謝野寛・晶子合著『巴里より』（金尾文淵堂刊）の装幀および挿絵を描く」。一九二三（大正一二）年、関東大震災罹災直後に「震災絵画」の大作二五点を制作、「移動震災実況油絵展覧会」を組織し代表となり、義援金を募るため各地を巡回する。翌年、富山に移住、一九三三（昭和八）年十一月、入院した折に与謝野寛・晶子が病床を見舞っている。一九三六（昭和一一）年、病没（享年六五歳）。一九七六（昭和五二）年、「野沢俊子（長女）により遺作一八点が成羽文化センター（現、高梁市成羽美術館）に寄贈され、遺作展が開催される」。二〇〇一（平成一二）年、「岡山県立美術館に三島和子（孫）により『自画像』などの油彩画、屏風などの日本画、資料類が寄贈され、今回の「知られざる震災画家 徳永仁臣・柳洲」展開催にいたっている。「知られざる」と冠せられているように、晩年を過ごした富山で没したこともあり、生地・岡山にあっても知る人が少なく、「その存在は美術界からも何処からも、忘れ去られたように消えてしまっていた」（政田孝「柳洲展に寄せて」（『図録』九二頁）が、富山・岡山ゆかりの諸氏による以下のような論が先行文献として挙げられる。

①福井文夫（富山県立近代美術館学芸員・富山県生れ）「富山で没した印象派の画家——徳永仁臣（柳洲）」（福井文夫「私的美術拾遺集」（桂書房、一九九二年）四〇〜五八頁）

②吉崎志保子「徳永柳洲と震災画」（『高梁川』第五二号（高梁川流域連盟、一九九四年）一九八〜二二頁）

③吉崎志保子「与謝野寛・晶子合著『巴里より』と徳永柳洲（二）（二）」（『樹木』七・八号（一九九六年）、二一七〜二二頁、二二五〜二九頁）

④高階秀爾「アカデミー・ジュリアンと徳永仁臣」（『明治美術学会誌 近代画説』5（明治美術学会、一九九七年）一三二〜一三六頁）

実は、早く「平成二三年度 就実公開講座「ことばと文化」」の担当回（『薄田泣菫『暮笛集』と与謝野晶子「みだれ髪」』（二〇一一年六月一八日）を政田孝氏（徳永柳洲顕彰会副会長・岡山県文化財保護協会理事）が聴講くださった御縁で、右の柳洲に関する全ての文献、『巴里より』の挿画関係の複写資料、加えて氏が直接撮影された「貼交屏風」等の写真資料、更には柳洲の絵画作品のカラー図版のスクラップに手書きで解説を一点一点添えられた図版資料を収めたファイル一式を、悉く惠贈頂いていた。ご厚意に甘え、寛・晶子と郷土出身の画家である柳洲との関係について常々気に掛けながら、まとまった成果を示せずにいた。余談になるが、右の吉崎志保子氏は、「岡山の歌人で、郷土史家でもあった」（政田氏「柳洲展に寄せて」（前掲）九二頁）とのことで、私が学部生だった頃、赤羽学先生の近世資料の講読会のためしばしば大学にいられていたことを思い出し、お名前を懐かしく

拝見した。今回の展示に際して、「徳永柳洲ルーツに思い 絵画展」予定の県立美術館館長 地元の和氣訪問（「山陽新聞」二〇一三年六月一日）などの新聞記事を（鍵岡県立美術館長・橋村学芸員・政田副会長のお名前もあり）、興味深く目に見ていた。

以下、「図録」では紙幅上割愛せざるを得なかった柳洲と寛・晶子の関わり、「巴里より」（前掲）の具体的な内容等によれ、「屏風」の短歌作品について解説を加える。

政田孝氏および橋村直樹氏に、改めて心より御礼申し上げたい。

二 徳永仁臣（柳洲）と与謝野寛・晶子

前項において、徳永の「年譜」の引用により与謝野寛・晶子との関係について概観したが、「巴里より」については、吉崎氏の論（一九九六、前掲③）にも言及されている。ここでは、逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子 大正篇』（八木書店、二〇〇九年）、同『新版評伝与謝野寛晶子 昭和篇』（八木書店、二〇一二年）により、寛・晶子側からの伝記的な記述から、徳永との関係について確認したい。

晶子は、「明治四五年五月二十九日午後四時、日本を発つてから二週間ぶりでバリの北の駅に着いた。寛は画家梅原龍三郎、徳永柳洲と二人のバリ人を伴って晶子を出迎えた」（逸見、二〇〇九年、五頁。傍線部及び（ ）内は引用者、以下同断）。「明治四五年七

月四日の午後、二人（寛・晶子）はロンドンを発つてベルギーに向かった。この旅程は「巴里より」で寛は「ブリュツセル」と「アントワープ」という二文に書いている。（中略）七月一日にパリへ戻った。この後、「巴里より」では晶子の「巴里の独立祭」の一文となる。（中略）革命の記念像の立っている賑やかな所へ行き、その帰りに徳永柳洲画伯の画室へ行き、近日中に油絵の稽古に行く約束をする」（同、一七頁）。

以上、徳永と寛・晶子の欧州での旅程と、晶子の「油絵の稽古」について述べられている。「巴里より」については、以下のよう

に書誌が説明されている。

「巴里より」(1)体裁と批評 大正三年五月三日（中略）金尾文淵堂より刊行。発行者は金尾種次郎（思西）。寛・晶子の「大正期」におけるはじめての共著である。渡欧した折の紀行文である。定価一円。本文四二六頁。体裁は菊判（縦22・6、横15センチ）、表紙は白地で上半分の桃色の囲みの中に西洋風の女の顔がある。（中略）徳永柳洲の「在欧中の画稿」が「此書の挿画と装幀」となり、「柳洲君の才筆を添へ得て」出版されたことに「意義」を感じて感謝しているとある（同、一九一〇頁）。これは、「巴里より」の巻頭、「よさの・ひろし」の署名で「巴里より」の初めに」と題し、以下のようにあることによる（同文の末尾に「大正三年五月」とある。引用は、「巴里より」（大正三年、四頁）によった。旧字体は新字体に改め、ルビは省略した）。

予と船を同じうして歐洲に遊び、予より一年遅れて帰つた徳永柳洲君が、在歐中の画稿から諸種の面白い材題を撰んで此書の挿画と装幀とに割愛せられたのはかたじけない。柳洲君の才筆を添へ得て初めて此書を世に出だす意義を生じたやうに思ふ。

「巴里より」目次（同書、五頁）の末尾には、「装幀及び挿画 徳永柳洲氏作」として、「巴里の街のマロニエ（箱）」「巴里の女（表紙）」「セエヌ河岸の古本屋（見かへし）」「キャツフェの夜（見かへし）」「画室の女（三色版）」「巴里のノートル・ダム（三色版）」「巴里のコメディイ・フランセエ座の希臘劇「エヂプ王」（コロタイプ版）」以下、「（コロタイプ版）」として、四点のタイトルが挙げられている。「（三色版）」の、「画室の女」は、「図録」の「11 バリー・キャンヌ」（同書、三五頁「1912—13年頃 油彩・キャンヴァス 高梁市成羽美術館蔵」）、「巴里のノートル・ダム」は、「図録」の「17 バリノートルダム寺院の夕もや」（同書、四一頁「1912—13年頃 油彩・キャンヴァス 高梁市成羽美術館蔵」）である。「作品解説」によると、「（パリー・キャンヌ）では、椅子に腰かけ、頬に手をあてている黒衣の女性」が描かれており、「帰国後の1915年の第9回文展に出品され、入選している」（同書、九七頁）。

晶子の別の著作でも、巻末の「著作目録」に「巴里より」が見出される。「朱葉集」（大正5・1）、「新訳紫式部日記 新訳和

泉式部日記」（大正5・7）の巻末にある「与謝野晶子女史著作目録」によると、菊判美本箱入三色版三葉コロタイプ版四葉写真版数十面（中略）画伯徳永柳洲氏また著者と同時に歐洲にあり、其遊學中の画帖を寄せて本書を飾られたり。（中略）「徳永柳洲画伯装幀彩画」ともある（同、二二頁）。また、「解題 巴里より」（「鉄幹晶子全集」10（勉誠出版、平成一五年）三三三—三三八頁）では、以下のように渡欧前後について説明されている。

寛のヨーロッパへの渡航は明治四十四年十一月八日に横浜港を郵船会社（現日本郵船）の熱田丸で出発している。マルセイユに十二月二十六日正午入港、マルセイユ市内を見学する等して熱田丸で二泊を過ごした後、鐵路で十二月二十八日にパリに到着している。熱田丸に同船していた画家で「万朝報」の徳永柳洲、画家の瀧谷四郎、長谷川昇、柚木久太と共にパリのパンテオン傍のスフロホテルに旅装をこく。先にパリに留学していた画家で「明星」に挿絵を寄せるなど交流をもっていた石井柏亭等の出迎えを受け、その紹介による。寛は徳永と同室で部屋をとっている。寛は明治四十五年一月四日付で、留守宅の晶子宛書簡の中で次のように報じている。

……よき下宿の見つけり候までは、このスフロホテルに止まるべく候。（中略）……只今は万朝の徳永君と同じ部屋に候。四十円程の部屋に二人で居れば二十円につき候。一ヶ月の後徳永君が画室を借りて移れば、小生は下宿へ移るか又はこのホテルにて、他の二十円位の小さき部屋へ移るか致すべく候。……小生は二階なれど瀧谷、長

谷川、柚木三人は下の部屋に三人同宿致候。(中略)

四十五年一月十七日付の晶子宛寛の書簡には次のように記されている。

(中略) 同行の友人は皆他へ画室を見附けて移り候に自分一人だけはホテルにまゐりて、気が落ちつかぬ故もあり候。(中略) 同室せし

徳永が本日から他へ移り候故、小生は全く一人ぼっちとなり、今夜から一層淋しき事と思ひ候。……

「スフロオホテル」で同室だった徳永が他へ移った後の心境を「淋しき事」と晶子に伝えている。

また、後年における寛・晶子の富山来訪に際しての詠草は、「寛の「北陸秋景」(一)一三九首は(中略)「以下富山にて」九首、「以下三首徳永仁臣君に」四首」(逸見、二〇二二年、三〇二頁)と詠まれた歌数が示されている。沖良機「資料 与謝野晶子と旅」(武蔵野書房、一九九六年)では、北陸での旅程を次のように示している(同書、六八―七〇頁)。

(昭和8年) 10月31日 北陸方面 寛と(夜汽車で) (中略) 11月1日 富山(鐘釣温泉) 宇奈月温泉 三日市宇奈月温泉 延野寺別館→黒部溪谷→鐘釣温泉→宇奈月温泉、延野寺別館(2泊) 2日 一日中作歌(泊) (11月) 3日 富山 富山市→(中略)→富山館(2泊) (中略) 5日 高岡 徳永氏見舞い→高岡→(中略)→延野寺旅館(1泊)

この旅程は、寛による「消息」(「冬柏」第四卷第二号(同号)に寛・晶子「北陸秋景」(一)(二)を収める、昭和八年一月)において、以下のように回想されている。

富山(二泊する予定にしたのは、大震災以来遠はなない徳永仁臣氏が爾来此地に住み、近頃病を得て病院に療養せられてゐるのを訪ひたいのが主たる理由であつたから、早速病院に赴いて久闊を斷し病状を問うた。既に回復期に向つて居て、発熱も無く、想つてゐたのと反対に元氣な氏を見て安心した。(同、一〇六五頁)

震災後、富山に移った徳永との再会を期しての富山来訪であつたことが伺われる。病状を心配していたが、「元氣な氏を見て」とあるように、この後、徳永は退院をしている。以上、寛・晶子側からの徳永柳洲に関連する資料を引用、概観した。

三 「詩歌貼交屏風(与謝野夫妻詩歌、柳洲絵)」(三島和子氏蔵 翻刻・解説

岡山県立美術館編「関東大震災から90年 知られざる震災画家 徳永仁臣―柳洲―」(岡山県立美術館・和気町・和気町教育委員会、平成二五年)掲載の「与謝野夫妻との交流 76詩歌貼交屏風(与謝野夫妻詩歌、柳洲絵)」・「遺品2与謝野寛・晶子合著「巴里より」」図版(同書、九〇頁)の橋村氏による「作品解説」(同書、九八頁)を引用する。

76(詩歌貼交屏風(与謝野夫妻詩歌、柳洲絵))

徳永と与謝野寛(鉄庵)は、ヨーロッパへ向かう船の中で知り合い親し

くなつた。歳が近くて馬が合つたのか、バリ到着後に滞在したオテル・スフロウにおいても徳水と鉄幹は同室で数週間通してゐる。半年後に返れてバリへ到着した鉄幹の妻晶子もまた、徳水から絵を教わるなど親しく交流した。徳水と与謝野夫妻とのバリでの楽しい日々については、与謝野夫妻が著し、徳水が装幀と挿絵を担当した「巴里より」（遺品2）から窺ひ知ることができる。

ここに紹介する《詩歌貼交屏風》は、徳水の娘の俊子が与謝野夫妻の詩歌と徳水の絵を貼交せて屏風仕立てにしたもので、父と与謝野夫妻との親交を目に見える形で伝えたいとの思いが込められている。この屏風に貼られている与謝野夫妻の詩歌は、貴重な資料であるため、以下に、翻刻と初出や所収歌集等の情報を挙げておく。（之三）（略）

*所収歌集や歌番号に関しては、晶子は「定本與謝野晶子全集」（講談社）に、寛（鉄幹）は「鉄幹晶子全集」（勉誠社）に基づいている。これらの翻刻および所収歌集や初出についてはすべて、日本近代文学を専門とする、就実短期大学の加藤美奈子氏にご教示いただいた。加藤氏からは、詩歌の公表時における表記・表現の異同などについても指摘いただいたが、紙幅の関係上、お教えいただいたことのすべてをここに記すことができなかった。これらの詩歌の詳細については、今後、加藤氏によって論文としてまとめられるだろう。

右の橋村氏の「作品解説」を承け、これらの短冊・色紙の揮毫

と、所収歌集、初出との異同を以下に示す（短冊・色紙の揮毫の改行箇所には「/」を用いている。揮毫との異同箇所は傍線で示した。初出に示した(1)～(5)は、歌の初句～五句である。「歌集同」は歌集所収歌との異同がないことを示す）。

第一属1（色紙）晶子

語らへば／モンバルナスの／秋かへる／我等の／友は／病むと／いへども

「語らへばモンバルナスの秋歸る我等の友は病むと云へども（以下富山にて）」

（所収歌集・歌番号：「いぬあぢさゐ」（昭和九年）37、初出：「北陸秋景（二）」（冬柏）（昭和八年十一月）歌集同）

「いぬあぢさゐ」は、「母物のかたちとしては改定社版『與謝野晶子全集』

第七卷（昭和九年八月刊行）に始めて収載された」歌集である（逸見久美

「解説」（「定本與謝野晶子全集」第七卷（講談社、昭和五十六年）四八―四九頁）。

なお、歌番号は同全集によった（以下同断）。

第一属2（短冊）晶子

越の國秋の雪ふる連山の／下に紅葉の暮ながく引く

「越の國秋のゆき降る連山のもとに紅葉の暮ながく張る」

〔所収歌集・歌番号〕「いぬあぢさゐ」(前掲) 41、初出：「北陸秋景(二)」「冬柏」(昭和八年二月) (2)秋の雪降る(5)幕長く張る

短冊「幕」を「引く」では、何事かの終わり、といった意味あいが出てくるため、「幕」とのつき具合をよりよく、広がりのある印象とするため、歌集では「張る」に推敲したのかもしれない。

第一扇3 (短冊) 晶子

月さしぬ城のくるはの内外をば／いみじき雪の溪に變へつ、

「月さしぬ城の廊の内外をばいみじき雪の溪に變へつ」

〔所収歌集・歌番号〕「いぬあぢさゐ」(前掲) 47、初出：「北陸秋景(二)」「冬柏」(昭和八年二月) (2)廊(5)変へつ

〔郭の仮名遣いは、歌集のルビ「くるわ」が正しく短冊・初出の「くるは」は誤り。〕

第一扇4 (短冊) 晶子

車して神通川の大橋を／昨日今日こえさてのちはいつ

〔「全集」未収録、未公委歌か。〕「神通川」を詠んだ歌には、「北海へ太平洋のかよへると神通がはの見えわたるかな」(「いぬあぢさゐ」(前掲) 38) 初出：「北陸秋景(二)」「冬柏」(昭和八年二月) (4)神通川のが見

出され、同じ時期の旅詠と推測される。

第一扇5 (色紙) 寛

立山の雪を仰ぎて／こゑ放つ／この清きもの／地の上に／あり

「立山の雪を仰ぎて聲放つこの清きもの地の上にあり」

〔所収歌集・歌番号〕「与謝野寛遺稿歌集」(昭和一〇年) 792、初出：「北陸日日」昭和八年二月八日(無題) 歌集同、再録：「北陸秋景(二)」「冬柏」(昭和八年二月) 歌集同

『与謝野寛遺稿歌集』は、昭和一〇年、「寛の「四十九日」に当たる五月

十五日(中略)明治書院から刊行された」(「解題」)『鉄幹晶子全集』31(与謝野寛遺稿歌集 白桜集)(勉誠出版 平成二二年)六〇四頁、没後編纂の歌集である。直前の『与謝野寛遺稿歌集』791「水色の大氣のなかに運山の雪高く見え秋の晴るる日」に「(以下富士に向ふ)」と副書がある。

第一扇6 (色紙) 寛

岩山のもみちの／なかに何の木ぞ／ひとりおち葉す／きぬをぬぐ

「岩山のもみちの上に何の木ぞひとり落葉す衣を脱ぐこと」〔所収歌集・歌番号〕「与謝野寛遺稿歌集」(前掲) 770、初出：「北陸日日」昭和八年二月四日(無題) (2)紅葉の上に(5)衣をぬぐ

と、再録：「北陸秋景色」（一）「冬柏」（昭和八年一月）歌集同

「与謝野寛遺稿歌集」（前掲）756「溪の路ひとつの岩の洞^{ほら}過ぎてすでに紅葉の山八重に立つ」に「以下黒部峡谷と宇奈月にて」と阿曾がある。色紙「なかに」が歌集では「上に」に推転されている。「上に」とすること、落葉した一木の孤高の姿を際立たせたかったのかもしれない。

第二扇1（色紙）晶子

恋といふ／身にしむ／ことを／正月の／七日ばかりは／思はずもかな

「戀と云ふ身に沁むことを正月の七日ばかりは思はずもかな」

（所収歌集・歌番号：「流星の道」（新潮社、大正一三年）2）

この一首のみ北陸での旅詠ではなく、発表時期も異なっている。「流星の道」は、「定本與謝野晶子全集」第四巻（露蔭社、昭和五年）所収。

第二扇2（短冊）晶子

山の湯場人引く櫓にまたがるは／魚津の沖の紫の蟹 晶子

「山の湯場人引く櫓にまたがるは魚津の沖のむらさきの蟹」

（所収歌集・歌番号：「深林の香」（昭和八年）407、初出：「北陸冬景」（「冬柏」（昭和六年一月））歌集同）

「深林の香」（中略）は昭和八年十二月十三日刊行の（改造社版）「與謝野晶子全集」第五巻に（中略）収録されたものである（逸見久美「解題」）（定本與謝野晶子全集）第六巻（前掲）五〇八頁）

「北陸冬景」（「冬柏」（昭和六年一月））は、昭和五年二月三〇日から昭和六年一月一四日まで、北陸方面への寛との旅中詠。金沢・山代温泉（石川県）、芦原温泉（福井県）を巡る旅であったが、「魚津」（富山県）の地名が見える叙景歌であったため、柳洲に採録されたのかもしれない。

第二扇3（色紙）寛

もみぢより／岩の壁出で／そのかけの／水ことごとく／青と瑠璃紺

「紅葉より岩の壁出でそのかけの水ことごとく碧と瑠璃紺」

（所収歌集・歌番号：「与謝野寛遺稿歌集」（前掲）765、初出：「北陸日日」（昭和八年一月四日（無題）（3）前の水（4）沙を挟みて（5）

ひ翠をば引く 再録：「北陸秋景色」（一）「冬柏」昭和（八年一月））歌集同）

初出では、「紅葉より岩の壁出で前の水沙を挟みてひ翠をば引く」であり、下の句が大きく変えられている。

第二扇4（色紙）晶子

いたゞきに／虹鍔るほどの／紅葉おく／黒部の溪の／梵鐘の山

「いただきに虹ばかりなる紅葉塗る黒部の溪の梵鐘の山」

〔所収歌集・歌番号〕「いぬあちさる」(前掲) 18、初出「北陸秋景(二)」「冬柏」(昭和八年一月) 歌集同

以上、晶子の揮毫七首の内、「第二扇1(色紙)」と「第二扇2(短冊)」以外の五首は、「北陸秋景(二)」「冬柏」(昭和八年一月)に所収された、昭和八年一月初旬の北陸方面への旅行詠であり、一月五日に柳洲を富山に見舞っているのは前述の通りである。「第二扇2(短冊)」は、昭和六年の「北陸冬景」(昭和六年一月)所収歌であることから、この時の旅行詠であることが推測されるが、「第二扇1(色紙)」のみ、詠まれた年代が正期で、他の揮毫とは異なり地域性がない歌である。

寛の揮毫三首はすべて、晶子と同じく昭和八年一月初旬の北陸方面への旅行詠で、「北陸日日」紙に掲載、「冬柏」(昭和八年一月)掲載の「北陸秋景(二)」に再録されている。「第二扇3(色紙)」は「北陸日日」紙では下の句を大きく変えたが「冬柏」掲載歌に揮毫に近い表現である。

「第一扇4(短冊) 晶子 車して神通川の大橋を／昨日今日こえさてのちはいつ」は、現時点では全集未収録で、未公表である可能性が高い。あくまで推測だが、旅行詠として事実在即しているが、下の句がやや拙く感じられ、発表にはいたらなかったの

かもしれない。「北陸秋景(二)」に「神通川」を詠んだ歌(前掲)

があり、この旅での詠であることはほぼ間違いないと思われる。「さてのちはいつ」には、病床にある柳洲への再会を期す思いとも取れ、発表歌としての完成度とは別に揮毫したのかもしれない。

自筆の短冊・色紙と、歌集、初出紙・誌との間で「表記」の異同が見られた。概ね、自筆の方がひらがなが多く、活字での掲載にあたって漢字が宛てられる傾向にあるが、その逆の例もある。また、活字においては、ルビが付される例もあり、新聞・雑誌掲載し、歌集に所収するにあたっての推敲のあとが見られる。

第一扇6(色紙) 寛「もみちの／なかに」↓歌集「もみちの上に」

第二扇4(色紙) 晶子「虹塗るほどの／紅葉／おく」↓歌集「虹ばかりなる紅葉塗る」

第二扇3(色紙) 寛「もみちより／岩の壁出で／そのかけの／水こと」とく／昔と瑠璃結」↓初出「前の水沙を挟みてひ翠をば引く」

寛が「三首徳永仁臣君に」と詞書して、徳永のことを詠んだ歌が「北陸秋景(二)」(前掲)に見出されるので、最後にその三首を引用しておく。

わが言葉常に異なり多きかな老いては明日をたのみ得ぬため

(三首徳永仁臣君に)

〔与謝野寛遺稿歌集〕 803 初出「北陸日日」(昭和八年一月八日(無題))

(5) 約し得ぬため 添書なし、再録「冬柏」(昭和八年一月「北陸秋景(二)」富山にて十とせ逢はざる友を見ぬ思ふも云ふも震災の前

〔与謝野寛遺稿歌集〕804 初出・「冬柏」(昭和八年一月)「北陸秋景」(一)
病より今は起くべく友なりぬ今日我が訪へば髪刈りて待つ

〔与謝野寛遺稿歌集〕805 初出・「冬柏」(昭和八年一月)「北陸秋景」(一)

〔底本〕

〔初出・歌集〕の引用は、晶子は『定本與謝野晶子全集』(講談社)により、寛(鉄幹)は『鉄幹晶子全集』(勉誠出版)によった。

・『定本與謝野晶子全集』第七卷(講談社、昭和五十六年)

「いぬあちさい」(前掲。同書三二〇頁) 138 頁、「北陸秋景」(一)

〔冬柏〕昭和八年一月 所収歌。

・『鉄幹晶子全集』31 (与謝野寛遺稿歌集 白桜集) (勉誠社、平成二二年)

〔与謝野寛遺稿歌集〕(前掲) 756-894 頁「北陸秋景」(一)「冬柏」

昭和八年一月 所収歌。

・『定本與謝野晶子全集』第四卷(講談社、昭和五十五年)

・『定本與謝野晶子全集』第六卷(講談社、昭和五十六年)

・『定本與謝野晶子全集』第七卷(講談社、昭和五十六年)

・『鉄幹晶子全集』10 (巴里より 八つの夜) (勉誠出版、平成一五年)

・『鉄幹晶子全集』31 (与謝野寛遺稿歌集 白桜集) (勉誠出版、平成二二年)

〔引用・参考文献〕

岡山県立美術館編 『関東大震災から90年 知られざる震災画家 徳永仁臣―柳洲―』(岡山県立美術館・和気町・和気町教育委員会、平成二五年)

沖良機『資料 与謝野晶子と旅』(武蔵野書房、一九九六年)

逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子 大正篇』(八木書店、二〇〇九年)

逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子 昭和篇』(八木書店、二〇一二年)

(かとう みなこ) 就実短期大学生活実践科学科准教授

研究室受贈図書雑誌目録Ⅲ

研究室受贈図書雑誌目録Ⅲ

京都大学 國文學論叢(京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室) 二九、三〇

京都府立大学学術報告 公共政策(京都府立大学) 四

京都府立大学学術報告 人文(京都府立大学) 六四

近畿大学日本語・日本文学(文芸学部文学科日本文学専攻) 一四、

一五

金城日本語日本文化(金城学院大学日本語日本文化学会) 八九

群馬県立女子大学 国文学研究(群馬県立女子大学国語国文学会) 三三

研究年報(大阪府立大学 上方文化研究センター) 一四

言語科学論集(東北大学大学院文学研究科言語科学専攻) 十七

言語表現研究(兵庫教育大学言語表現学会) 二九

言語文化(一橋大学語学研究室) 四九

言語文化学研究 日本語日本文学編(大阪府立大学人間社会学部

言語文化学科)